

- (24) 創世記第一章二七節。
- (25) 原理講論(中文版)、三八二頁。
- (26) 同上、三八四―三八五頁。
- (27) 同上、三八五―三八六頁。
- (28) ヘーゲル弁証法の体系は「存在論」(Lehre vom Sein)においても、「本質論」(Lehre vom Wesen)においても、または「概念論」(Lehre vom Begriff)においても、その対立概念である「正」(Thesis)と「反」(Anti-thesis)とは、皆相助け合うものとする。すなわち、存在(Sein)では、「質」(Qualität)と「量」(Quantität)とを「正」と「反」とし、概念(Begriff)では、「本質」(Wesen)と「顕象」(Erscheinung)とを「正」と「反」とし、「観念」(Ideen)では「主観性」(Subjektivität)と「客観性」(Objektivität)とを「正」と「反」とする。その他の自然哲学または精神哲学も皆そうでないものではなく、皆その存在過程を展示するものであり、衝突過程を顕現するものではない。

## 大宗教の經典から見た宗教統一の可能性



李恒寧 (Lee Hang Nyong)

一九一五年生まれ。京城帝国大学卒業。高麗大学校教授、法科大学学長、弘益大学校総長を歴任。現在、弘益大学校名誉教授。専攻、法学。世界平和教授協議会会長。主な著書『法哲学概論』『法哲学的人間学』他。

## 一 大倭教の略史（倭は古代神人の意味である）

大倭教は檀君を信仰する宗教で、韓民族はその発生の初めからその始祖と思われる檀君を祭った。「三国遺事」には、桓因の庶子桓雄が、弘益人間の理想をいだいて白頭山に下り神市を建設して、地上の熊族の女と結婚して檀君を生み、その檀君が韓民族の最初の国家である朝鮮を建国したと記されている。

檀君は天神の子孫であるから、檀君を祭ることはすなわち天神を祭ることになり、それは祭天の様式として現れた。

韓民族は、自ら天神の子孫であるという自覚から、早くから祭天の儀式を持ったが、現今する京畿道江華郡摩尼山の塹星壇は、このような祭天壇の一つとして考えられている。塹星壇は檀君が祭天した所で、この祭天儀式は、扶餘時代に伝わり代天といわれ、陰暦十月に迎鼓という祭名で挙行され、そのときには国中大会して歌舞飲酒を楽しみ、三韓時代には稷飲という祭名で行われた。

三国時代に入ると、高句麗では敬天といい、祭名は東盟といい、新羅では崇天といい、百濟では効天といった。統一新羅では風流道として祭天し、高麗では八閔会として祭天し、朝鮮では倭教として祭天したが、倭とは古代神人の意味である。しかし朝鮮時代に儒教が国教となつてから、大義名分上天子国でない朝鮮国で祭天するのは不可であるとして、祭天儀式は廃止された。やがて三国時代に道教が入り祭天風習が生まれ、これは統一新羅時代、高麗時代まで昭格殿にて祭天した。朝鮮時代に入っても昭格殿において祭天が行われ

たが、これも儒家の反対で廃止された。

朝鮮の高宗のとき、清国の従属国から独立して称帝建元するに至り、京城の小公洞に円丘壇を設置して皇帝が祭天したが、韓日合併の後円丘壇は廃止された。

韓民族は天神を信仰して、祭天儀式を長い間国家的行事として続けたが、途中で廃止された。しかし民間信仰としての天神信仰はそのまま続けられてきた。庶民達は浄華水を捧げて祭天して願望を祈り、七星壇にて致誠するのが素朴な天神信仰の形態であった。それは王朝の変動と関係なく、庶民達の間に伝わってきた。

旧韓国末に日本が韓国を侵略する行為が甚しくなるや、弘嚴羅喆（一八六三—一九一六）は檀君信仰を復興し、一九〇九年一月十五日大倭教を重光した（重光とは、創教したのでなく、上古から存在した檀君教が暗闇に沈んでいたのを再び明らかにしたという意味であり、倭とは上古神人の意味であり、その倭の字に大の字をつけて大倭教といった）。しかし一九一五年朝鮮総督府が大倭教を不法化したため、大倭教は満州にて独立運動を継続して、一九四五年の解放とともに一九四六年に帰国した。

羅喆は、日帝の侵略による亡国の非運を予感して、伝統的な民族宗教を復興させて国運を打開しようとした。

しかし一九一〇年韓日合併がなるや、一九一六年黄海道九月山にて殉教した。九月山は桓因、桓雄、檀君の三神を祭る三聖祠があるところである。

羅喆が殉教した後、その後を継いだ二代教主茂園金猷は、日帝の迫害のために一九一七年総本司を満州に移した。一方、教統継承を辞退した白團徐一は独立運動に終始したため、壇屋尹世復が金猷の後を継いで三

代教主となった。終戦とともに一九四六年総本司が京城に帰国し、帰国以来教統伝受制度を廃止して、総典教制度を採択し、自ら第一代総典教に就任して、爾来今日まで諫元老が総典教を継承している。

## 二 大倭教の経典

### (1) 三神誥

その伝来の経路

大倭教の基本経典は三神誥である。三神誥は、神が人間に化身して白頭山に降臨し、人間に啓示した経典である。その三神誥が今日まで伝わってきた経路が奉藏記に記されているが、三六六甲子年に神が白頭山に下り、土地を開拓して人間と万物を育生し、一二五年戊辰年十月三日靈宮にて三神誥を啓示された。そのとき、彭虞は三千団部の群衆を率い、高矢は青い石を東海浜から運搬し、神誥はその石に絵様の文字を刻んだと伝えられている。後に箕子が、一土山人王受兢を招聘し、殷の甲骨文字に翻訳させ、壇木に書いて読んだ。伝える話によると、右の原本は扶餘の国庫に蔵され、壇木の原本は衛滿朝鮮が保管していたが、皆戦争によりなくなり、ただ高句麗にて漢字で翻訳されて伝わったのを、渤海の高王大祚榮が賛文をつけて靈宝閣においたのを、文王が白頭山報本壇の石室に隠しておいた。それを韓末に、倍達民族の破滅を救い人類に平和をもたらすため、神が神仙である白峰を送って捜させ、伯佺と杜一白をして、一九〇五乙巳年に羅喆に伝受したという。

三一神話の内容  
第一章 天訓

帝日 元輔彭虞 蒼蒼非天 玄玄非天 天 無形質 無端倪 無上下四方  
虚虚空空 無不在 無不容

第二章 神訓

神在無上一位 有大德大慧大力 生天 主無數世界 造衆衆物 織塵無漏  
昭昭靈靈 不敢名量 声氣願禱 絶親見 自性求子 降在爾腦

第三章 天宮訓

天 神国 有天宮 階万善 門万德 一神悠居 群靈諸哲 護侍 大吉祥  
大光明處 惟性通功完者 朝 永得快樂

第四章 世界訓

爾觀 森列星辰 數無盡 大小 明暗 苦樂 不同 一神 造群世界  
神勅日世界 使者 轄七百世界 爾地自大 一九世界 中火震盪 海幻陸遷  
乃成見象 神呵氣包底 煦日色熱 行 化游栽 物繁殖

第五章 真理訓

人物同受三真 日性命精 人全之 物偏之 真性 無善惡 上哲通 真命

無清濁 中哲知 真精 無厚薄 下哲保 返真一神 惟衆迷地 三妄着根  
日心氣身 心依性 有善惡 善福惡禍 氣依命 有清濁 清壽濁歿 身依精  
有厚薄 厚貴薄賤  
真妄对作三途 日感息触 轉成十八境 感 喜懼哀怒貧厭 息 芬瀾寒熱  
震湿 触 声色臭味淫抵  
衆 善惡清濁厚薄 相雜 從境途任走 墮生長肖 病歿苦 哲 止感調息  
禁触 一意化行 返妄即真 發大神機 性通功完 是

これを翻訳すれば次の通りである。

第一章 天の教え

天帝日く、元輔（今日の総理に該当す）彭虞（山川を治める臣民）よ聞け。あの青いのが天ではなく、あの黒いのが天ではない。天は形も内容もなく、初めも終わりもなく、上下四方もなく、虚空にしている所がなく、色のない所もない。

第二章 神の教え

神は無上の一位において、大徳と大慧と大力をもって天を生み、無数世界を主管し、万物を創造し、細か

い塵も漏さない。昭昭靈靈にして敢えて名づけて量ることができない。声気で願禱すれば絶対に見ることができない。自らの本性にその種子を求めると汝の脳にある。

### 第三章 天宮の教え

天は神の国である。天宮があり、万善をもって階段を造り、万徳をもって門を造っている。一神が悠居し、群靈と諸哲が護持している。大吉祥大光明のところをただ本性を通し功勞を完うした者のみが進み入り、永久の快樂を得ることが出来る。

### 第四章 世界の教え

汝は森列した星辰を見よ！ その数は無盡で、大小、明暗、苦樂は同じでない。一神が群世界を創造し、神が日世界の使者をして七百世界を統轄する。汝の地が自ら大きいと思っても、一丸の世界にすぎない。中の火が振動爆發して海となり、陸となり、ついに今見えるような現象となった。神が気をふいて底まで包み、太陽の光と熱を照し、歩き、飛び、変化し、泳ぎ栽培するいろいろな物が繁殖した。

### 第五章 真理の教え

人間と万物はともに三真を受けているが、これは性と命と精である。人間はこれを完全に受けているが、万物は偏つて受けている。真性は善悪がないが上哲は通じ、真命は清濁がないが中哲は知り、真精は厚薄が

ないが下哲は保つ。真に返れば一神になる。

大衆は地に迷い三妄に根を下す。これは心と氣と身である。心は性に依存し善悪があり、善なれば福を受け悪なれば禍を受ける。氣は命に依存し清濁があり、清ければ長生し濁れば早死する。身は精に依存し厚薄があり、厚ければ貴くなり薄ければ賤しくなる。

真と妄が相対して三途を造るが、これは感と息と触である。これはさらに十八境に転成する。すなわち感は喜懼哀怒貧厭となり、息は芬爛寒熱震濕となり、触は声色臭味淫抵となる。

普通の大衆は善悪清濁厚薄が相交わり、境途に従って任意に起こり、出生し生長し老い、病氣になり死ぬ苦痛に墮るが、哲人は感を止め息を調え触を禁じ、一意にて化行し妄を返して真に即し、一神機を發し本性を通じ功勞を完うするのがこれである。

#### その大意

三一神誥の大意を祭すれば、第一章の天訓は宇宙空間の無形無跡であることと、天道が無窮なることを明にし、第二章の神訓は、神が万有の主宰者で、大徳、大慧、大力の三大権能を持ち、天地万物を創造したことと、神はまた人間の脳裡に下りるといふ神人合一の教えである。

第三章の天宮訓は、来世観で、万善と万徳で造られ大吉祥大光明の所である天宮は、正しい信仰と修道で本然の真の姿に返った人のみ進み入り、永遠の快樂を得るといふのである。第四章の世界訓では、宇宙創造の過程と現象を論じているが、宇宙間のあらゆる現象は、主宰者である一神が創造し、その一神が大氣をふきこみ、万物を繁殖させるといふ。

第五章の真理訓では、万物は性命精の三真を受けているが、無善悪の真性は上哲が通じ、無清濁の真命は中哲が知り、無厚薄の真精は下哲が保存し、哲人が本性を通じ功勞を完うして真に返れば神となり、三真と三妄が対立して三妄である心気身は善悪、福禍、清濁、寿夭、厚薄、貴賤が分かれたといった。このような真妄の対立から感息触の三途をつくるが、これはさらに十八境に転成し、哲人は止感、調息、禁触の三法にて、性通功完の真境に入るといった。

## (2) 天符経

天符経は、三一神誥が伝受されてから十一年後の一九一六年丙辰年に、採葉師の桂延寿が太白山の石壁にて発見した。天符経は檀君時代に神誥が篆字で古い碑石に書き、新羅末の孤雲、崔致遠がその文字を解釈して太白山に刻んだのを桂延寿が発見して、二年後の戊午年に曙宇全秉勲がこれを手に入れ、一九一九年己未年に中国の北京にて「精神哲学通編」を発刊し、その中に天符経とその解説を記したのが今日に伝わっている。

天符経

① 一始無始一 析三極 無盡本

② 天一 地一二 人二三 一積十鉅 無置化三 天二三 地二三 人二三

大三合六 生七八九

- ③ 連三四成環五七 一妙衍 萬往萬來 用變不動本
- ④ 本心本 太陽昂明 人中天地一
- ⑤ 一終無終一

これを翻訳すれば次の通りである。

① 一つは初めであるが、初めがないのも一つである。これが分かれて三極になるが、その根本は尽きるところがない。

② 天の初めは一つであり、地の初めは二つであり、人の初めは三つであるが、一つを積み重ねると十の大きな数に至るが、間違いなく三つとなる。

天の二番目は三つであり、地の二番目も三つであり、人の二番目も三つであるが、大きな三つが合わさって六つになり、七つ八つ九つを生む。

③ 三を運かして四となり、五と七は円環となる。一つが妙に発展して万国行き万国来るが、作用は変化しても根本は動かない。

④ 心の根本に根本をおくと、太陽が昂明して人間の中に天地が一体となる。

⑤ 一つは終わりであるが、終わりが無いのも一つである。

今、天符経の大意を察すれば、三一哲学といわれるくらい一と三の原理を語っている。一は三に行き三はさらに一に帰るが、一は本体で三は作用であり、一は一神であり三は天地人の三極である。一は一神であるが、無限大の宇宙と無限量の根元であるため無始無終にて、天地人の三極に別れても、一神は一神のまま残り、また一神はすなわち本心であるから、人が本心を守れば太陽の光明が昇って、人間の中で天地が一体になるといっている。

### (3) 八理訓

天符経は八一字であり、三一神誥は三六六字であるが、八理訓(参佺戒経ともいう)は三六六訓でできている。これは大倭教の礼節といわれる修養経典で、高句麗の宰相、乙巴素の撰となっている。この聖典は日帝時代に檀君教により知られたが、出版はできなかった。終戦後一九六六年、公州の朴魯哲が『檀君礼節教訓聖経三百六十事』という名で出版した。その後一九七二年大田の壇壇学会から『参佺戒経』という名で出版された。

八理訓は大きくは誠・信・愛・濟・禍・福・報・応の八理を基本綱領として、各理ごとにくつかの章(体)に分かれ、各章はまたいくつかの訓(用)に分かれ、全体は八理四六章三六六訓にて成っている。その内容は次の通りである。

#### 第一理 誠(第一訓)

##### 第一章 敬神 (第二訓)

第三訓—尊奉 四—崇徳 五—導化 六—彰道 七—克禮 八—肅静  
九—淨室 十—扱齊 十一—懐香

##### 第二章 正心(十二)

十三—意植 十四—立身 十五—不惑 十六—溢蔽 十七—虚靈 十八—致知 十九—開物  
二〇—斥情 二一—默安

##### 第三章 不忘(二二)

二三—自任 二四—自記 二五—賠膺 二六—在自 二七—雷虚 二八—神聚  
第四章 不息(二九)

三〇—勉強 三一—圓轉 三二—休算 三三—失始 三四—塵山 三五—放運 三六—慢他  
第五章 至感(三七)

三八—順天 三九—應天 四〇—聽天 四一—樂天 四二—待天 四三—戴天 四四—禱天  
四五—恃天 四六—講天

##### 第六章 大孝(四七)

四八—安衷 四九—鎖憂 五〇—順志 五一—養體 五二—養口 五三—迅命  
五四—忘形

第二理 信(五五)

第一章 義(五六)

五七—正直 五八—公廉 五九—惜節 六〇—不貳 六一—無親 六二—捨己 六三—虛誑  
六四—不尤 六五—替擔

第二章 約(六六)

六七—踐實 六八—知中 六九—統斷 七〇—排忙 七一—重視 七二—天敗 七三—在我  
七四—付適 七五—何悔 七六—撻合

第三章 忠(七七)

七八—佩政 七九—擔重 八〇—榮命 八一—安民 八二—忘家 八三—無身

第四章 烈(八四)

八五—賓遇 八六—育親 八七—嗣孤 八八—固貞 八九—昵仇 九〇—減身

第五章 循(九二)

九一—四時 九二—日月 九三—德望 九四—無極  
九八—幼兒 九九—似是 一〇〇—既誤 一〇一—將失 一〇二—心蹟 一〇三—由情

第三理 愛(九六)

第一章 恕(九七)

九八—幼兒 九九—似是 一〇〇—既誤 一〇一—將失 一〇二—心蹟 一〇三—由情

第二章 容(一〇四)

一〇五—固然 一〇六—情外 一〇七—免故 一〇八—全味 一〇九—半程 一一〇—安念  
一一一—緩急

第三章 施(一一二)

一一三—原喜 一一四—認懇 一一五—矜發 一一六—公領 一一七—偏許 一一八—均隣  
一一九—厚薄 一二〇—付混

第四章 育(一二二)

一二三—導業 一二四—保產 一二五—獎勸 一二六—警墮 一二七—培幼  
一二八—勸瞻 一二九—灌涸

第五章 教(一三〇)

一三一—顧賦 一三二—養性 一三三—修身 一三四—湊倫 一三五—不棄 一三六—勿損  
一三七—達勉 一三八—力收

第六章 待(一三九)

一四〇—未形 一四一—生芽 一四二—寬遂 一四三—穩養 一四四—克終 一四五—傳托

第四理 濟(一四六)

第一章 時(一四七)

一四八—農災 一四九—涼怪 一五〇—熱染 一五一—凍芽 一五二—無時 一五三—往時

一五四―將至  
第二章 地 (一五五)

一五六―撫柔 一五七―解剛 一五八―肥甘 一五九―燥濕 一六〇―移物 一六一―易種  
一六二―拓闢 一六三―水山

第三章 序 (一六四)

一六五―先遠 一六六―首濱 一六七―輕重 一六八―衆寡 一六九―合同 一七〇―老弱  
一七一―狀健

第四章 智 (一七二)

一七三―設備 一七四―禁癖 一七五―要儉 一七六―精食 一七七―潤資 一七八―改俗  
一七九―立本 一八〇―收殖 一八一―造器 一八二―預劑

第五理 禍 (一八三)

第一章 欺 (一八四)

一八五―匿心 一八六―慢天 一八七―信獨 一八八―蔑親 一八九―驅殞 一九〇―踢傾  
一九一―假章 一九二―無終 一九三―怙恩 一九四―恃寵

第二章 奪 (一九五)

一九六―滅産 一九七―易祀 一九八―虜金 一九九―謀權 二〇〇―偷券 二〇一―取人

第三章 淫 (二〇二)

二〇三―荒邪 二〇四―戕主 二〇五―藏子 二〇六―流胎 二〇七―強勒 二〇八―絶種

第四章 傷 (二〇九)

二一〇―凶器 二一一―鳩毒 二一二―奸計 二二三―摧殘 二二四―必凶 二二五―委唆  
二二六―凶謀

第五章 陰 (二二七)

二二八―黒箭 二二九―鬼焰 二三〇―妬賢 二三一―嫉能 二三二―間倫 二三三―投質  
二三四―送絶 二三五―誹訕

第六章 逆 (二二六)

二二七―褻神 二二八―瀆礼 二二九―敗理 二三〇―犯上 二三一―逆詬

第六理 福 (二三二)

第一章 仁 (二三三)

二三四―愛人 二三五―護物 二三六―替惻 二三七―喜救 二三八―不驕 二三九―自謙  
二四〇―讓劣

第二章 善 (二四一)

二四二―慷慨 二四三―不苟 二四四―遠嫌 二四五―明白 二四六―繼物 二四七―存物  
二四八―空我 二四九―揚能 二五〇―隱愆

第三章 順 (二五一)

二五二―安定 二五三―静黙 二五四―礼貌 二五五―主恭 二五六―持念 二五七―知分  
第四章 和(二五八)

二五九―修教 二六〇―遵戒 二六一―温至 二六二―勿疑 二六三―省事 二六四―鎮怒  
二六五―自就 二六六―不謀

第五章 寛(二六七)

二六八―弘量 二六九―不吝 二七〇―慰悲 二七一―保窮 二七二―勇赴 二七三―正旋  
二七四―能忍 二七五―藏呵

第六章 巖(二七六)

二七七―屏邪 二七八―特節 二七九―明察 二八〇―剛柔 二八一―色莊 二八二―能訓  
二八三―急祛

第七理 報(二八四)

第一章 積(二八五)

二八六―世久 二八七―無斷 二八八―益増 二八九―庭授 二九〇―天心 二九一―自然  
第二章 重(二九二)

二九三―有早 二九四―恐失 二九五―勉勵 二九六―株守 二九七―斥謗 二九八―廣佈  
第三章 瓶(二九九)

三〇〇―有久 三〇一―有隣 三〇二―其然 三〇三―自修 三〇四―不倦 三〇五―欲及

第四章 盈(三〇六)

三〇七―襲犯 三〇八―連続 三〇九―有加 三一〇―博悪

第五章 大(三一)

三二一―勘尚 三二二―無憚 三二四―驟峻 三二五―外善  
第六章 小(三二六)

三二七―背性 三二八―断連 三二九―不改 三三〇―勤隣

第八理 應(三三二)

第一章 積(三三二)

三三三―極尊 三三四―巨有 三三五―上寿 三三六―諸孫 三三七―康寧 三三八―仙安  
三三九―世襲 三三〇―血祀

第二章 重(三三三)

三三三―福重 三三三―玉帛 三三四―節化 三三五―賢裔 三三六―健旺 三三七―吉慶  
三三八―世章

第三章 淡(三三九)

三四〇―應福 三四一―裕庫 三四二―無厄 三四三―利随 三四四―天卷

第四章 盈(三四五)

三四六―雷震 三四七―鬼喝 三四八―滅家 三四九―絶祀 三五〇―失屍

## 第五章 大(三五二)

三五二―刃兵 三五三―水火 三五四―盜賊 三五五―獸害 三五六―形役 三五七―天羅  
三五八―地網 三五九―及身

## 第六章 小(三六〇)

三六一―貧窮 三六二―疾病 三六三―敗亡 三六四―靡室 三六五―道巧 三六六―及子

## (4) 神事記

神事記は一九〇五年乙巳年に伯俚が羅喆から三一神話を伝えられたとき一緒に伝えられたが、これは歴史の聖典として啓示されたものである。

神事記は造化紀、教化紀、治化紀の三経に分かれている。

はじめの造化紀は、神が宇宙を創造した過程を記したもので、無限の愛である大徳の造化主桓因の作用で天国を開き、天体と万物を造り、仙官神將に職分を与え、日世界と雨、風、雷等を主管させ、一男一女を白頭山において人類の始祖と定めた等、大宗教の創世記といえることができる。

二番目の教化紀は、無限の智慧である大慧の教化主桓雄の作用によって、天下に降臨して大道を立て、大教(大宗教)を説いて三一神話五訓で教化したという。

三番目の治化紀は、無限の力の大力である治化主桓儉(檀君)の作用によって、穀物、生命、疾病、刑罰、善悪の五事を主管し、弘益人の世として国を建て、万万世に系統を伝えるようにし、三仙四靈をして人間の

三六六事を治めさせ、彭虞は治山治水と家屋をたて、高矢は農事と火食を、匪西岬神母は物を織り衣物を作り、飲食、衣服、住居の制度を整え、神誌は文字を作って倫理を教え、渥且は病気を治療し、持提は風俗を、肅神は姦悪なことをとりしまり、守己は善行を勤め賞罰を明らかにし、男女、父子、君臣制度を初めて定めたという歴史の記録である。

## (5) 神理大全

神理大全は羅喆が性通功完了後啓示を受けて作った聖典で、神位、神道、神人、神教の四編である。

はじめの神位編では、神位は桓因、桓雄、桓儉の三位であることを記し、この三位は唯一神である神の三作用であって、三位は一体であり、無上の全知全能にして天地人に対し無上、無始、無先であることを説いている。

二番目の神道編では、形象なくして形象し(無形形)、言葉なくして語り(無言言)、爲すことなくして爲す(無爲爲)ため、宇宙万物はこれにより生まれ、変化し、成就するといっている。

三番目の神人編では、無形が一度現れて、神人の形で降臨したまい(見而有形)、言葉はないが一度行えば神人としての教化の言葉となり(行而有言)、為すことはないが一度動けば治化の治めとなり(動而有爲)五族を養って万国の上王となり、五訓を広めて億兆蒼生の始祖となり、五事を施して百教の始めとなったといっている。

四番目の神教編では、大宗教の原理が三一であり、一があっても三がなければ作用がなく、三があっても

一がなければ主体がなく、従って一は三の主体となり、三は一の作用になる。故に、大宗教の一三と三一を学び修めれば、神に帰って一つとなり、我自身が天界の創造と運行の神功に参与して神人になるといつている。

### (6) 会三経

会三経は白圃徐一が性通功完了後に啓示を受けて作った聖典で、三神(桓因、桓雄、桓儉)三哲(上哲、中哲、下哲)三妄(心、氣、身)三途(感、息、触)三我(性天、靈神、道徳)三倫(愛、礼、道)三界(神、人、魔)三会(大、中、小)帰一(三真帰一、返真一神)の九編に分かれ、三二神誥を仏教の妙法と易学と道教の原理に哲学を加えて解説したものである。徐一は儒仏仙に通達した大哲で、儒仏仙を抜粹してその精随を総合したものが三二神誥であるといっている。従って儒仏仙は小我であり、これらが集まって一になったのであるが、その根本が大我であり、その大我が三二神誥であることを明らかにしている。

### (7) 三法会通

三法会通は、尹世復が五十余年間にわたって大宗教の修行成哲法である三法を修行した体験により、その修行方法を記したものである。これは第一章・三法名、第二章・三法略説、第三章・三法会通に分かれている。

### (8) 神壇実記

神壇実記は、金獻が、神人檀君の実記の意味で、檀君の史蹟と固有神教の形跡を内外の文献から抜粹して、大宗教の歴史を明らかにしたものである。

## 三 大宗教の思想

大宗教の経典中最も重要なものは、天符経と三二神誥である。天符経は三二神誥の主体となる経典であり、三二神誥は天符経の作用である経典で、この二経典は相補の関係にある。今この二経典を中心として、大宗教の思想を考察してみる。

### (1) 大宗教の宇宙観

大宗教では、宇宙は神が創造したことになる。宇宙の起源に関しては、キリスト教の創造説と東洋の自然発生説と科学者の宇宙進化説がある。創造説は全知全能の神が超越的権能をもって宇宙万物を創造したといひ、自然発生説は、仏教では宇宙の森羅万象は因縁により作られたといひ、儒教では、太極(理)と陰陽(氣)の作用により宇宙万物が生成したといひ、科学者は、太初にエナジーが大爆発して分散膨張し、天体と万物が進化的に形成されたという。大宗教の宇宙起源論は創造説に似ている。しかしキリスト教の創

造神は超越的存在で人間とは隔離されているが、大倭教の創造神は超越的存在であると同時に人間に内在して、心の根本に根本をおくと太陽が昂明して人間の中に天地が一体となるという。大倭教には天人合一の思想があって、この点でキリスト教と異なる。

従って宇宙創造の三体である神に対する見解も、天神、地神、人神の三神一体となる。大倭教の神観は、神は唯一神であるがこの一神は大徳、大慧、大力の三権能を持ち、大徳は生の原理、大慧は化の原理、大力は成の原理であり、生は造化であり、化は教化であり、成は治化である。一つの神がこの三つの力をもってこの三つを行うとき、各々その造化を桓因といい、その教化を桓雄といい、その治化を桓儉というのみで、神が三つ存在してこの三つを各々行うのではないという。従って、分かれれば三つであり合わされば一つだという神位が定まり、この神の位相によって宇宙万物の造化が成し遂げられ、一は三の本体となり三は一の作用となる。

## (2) 大倭教の世界観

大倭教では上中下三界、すなわち神界と人間界と魔界を記している。三一神誥天宮訓を見ると、万善万徳の吉祥光明の天宮に入るためには、性通功完（本性を通じ功勞を完うする）すなわち修道をして使命を果たさなければならぬ。このような性通功完了した人がゆく所が天宮、すなわち神界であり、そうでない人がゆく所が魔宮、すなわち地獄である。人間はその中間にある人間界に住んでいる。

大倭教では浄土とか天堂のような来世の理想郷を天宮というが、その天宮は天上天宮、地上天宮、人身天

宮に分かれ、天上天宮は神の国に、地上天宮は白頭山に、人身天宮は人間の頭にあるといっている。地上天宮が白頭山にあるというのは、大倭教においては白頭山が人類の発生地と見るからである。大倭教によれば、人類の始祖は那般と阿曼であるが、彼らは最初満州の松花江上流、すなわち白頭山近くに住み、これらの子孫が黄、白、玄、赤、藍の五色人種に分かれたという。

## (3) 大倭教の人間観

人間と万物は皆先天的に性、命、精の三真と心、氣、身の三妄を受けて生まれた。普通の大衆は三妄に流れ苦痛を受けるが、止感、調息、禁触の三法を修め修行すれば真境に至り、性通功完して性、命、精の三真に帰一すれば哲人になる。哲人はすなわち神と合一した境地である。

大倭教の人間観は会三経三我編によく表れているが、三我とは性（天）我、靈（神）我、道（倭）我をい、我とは天神大道から降り受けた種子をいう。性我は自尊に偏しやすから独我観をたて、靈我は自愛に偏しやすから為我観をたて、道我は自謙に偏しやすから無我観をたてる。これらの独我観、為我観、無我観は、独り行うときは自尊、自愛、自謙に偏するから、三つが一体とならねばならない。この三我が一体となったのが大我である。

天は我が性であり、神は我が靈であり、倭は我が道であるが、我相というものが本来あるのではなく、神道の変換により生まれるもので、神化の作用により不可避なる原理に従うようになる故に、先天的な我は始めがなく、後天的な我は終わりが無い。このような我は自身の我ではないということに帰結する。結局我と

いうのは、ある個体または自身に対する一人称の代名詞だけではない。

小我観においては私自身のみ我と思うが、大我観においては私以外の全人類が我でないものはない。私個人と人類と神と宇宙が一体となるのが正に大我であるという。

#### (4) 大宗教の三教合一思想

大宗教の教理の特徴は儒仏仙三教の合一性にある。修養方法である止感、調息、禁触を見ても、感情を抑制する止感法は明心見性する仏教に似ており、呼吸を調える調息法は養気煉性する仙道に似ており、接触を禁ずる禁触法は修身率性する儒教に似ている。

また三我観において、天の性我、神の靈我、俗の道我における性我の独我観、靈我の為我観、道我の無我観は、各々止感、調息、禁触すなわち三教の修養法に通ずる。

### 四 大宗教から見た宗教統一の可能性

#### (1) 大宗教の総合性

##### (1) 檀君信仰思想の伝承

大宗教は一九〇九年に創立されたが、本来五千年前に存在した檀君信仰思想を重光したため、檀君信仰が本来総合的なように、大宗教もまたその思想構成が総合的である。

檀君信仰思想を伝えたのは「三国遺事」の記録と「桓壇古記」の記録である。三国遺事には昔、桓国（その主宰者が桓因である）があったが、桓因の庶子・桓雄がしばしば天下を思い人世を貪求した（貪求人世）。父たる桓因はその子の考えを知り（父知子意）、天符印三つと神衆三千を与え、白頭山の神壇樹の下に降りさせて、神市を建設して弘益人間の理想を達成させた。

このとき地上の熊と虎が人間になりたいと願ったので（願化為人）、桓雄はかれらに、よもぎ（蓬）とんにく（蒜）を食し百日間日光を見ないなら人間になるといった。熊は二十一日間謹しんだので女の人間となったが、虎は放棄して人間になれなかった。熊から女になった熊女が子を妊娠したいと願うので（呪願有孕）、桓雄は臨時に人間と化して結婚し（化而婚之）檀君を生み、その檀君が朝鮮を開国して最初の統治者となったと記されている。

三国遺事には桓国を天上の国、神市を神仙の国、朝鮮を地上の国としているが、桓壇古記、三聖紀には、桓国は天上の国ではなく地上の实在国と記されており、波奈留の山下に南北五万里、東西二万里の十二国から構成され、この存続期間も七世三三〇一年となっており、桓雄も天国から下降したのではなく、桓国の末に太白に倍達国をたて、終わりに青邱国に移り十八世一五六五年間続いたといい、各代の桓雄の在任期間とその寿命が記されている。

##### (2) 神人合一思想

桓国と倍達国が天国と神仙国という非地上国家であったか、または現実的地上国家であったかは問題である。三国遺事の檀君説話までも实在の事実でなく、ただ神話にすぎないと見る人も少なくないので、桓壇古

記の桓国と倍達国を地上国家として実在したと信じない人が多いであろう。しかし桓国や倍達国が実在した地上国家でないとしても、そこには先人たちの理想化された思考をうかがうことができるから、それを一つの信仰形態として持つことはあり得ることだと思う。大宗教は本来天上の神と地上の神と人間の神が三神一体であるという神人合一の教理であるため、桓国とか神仙国とか朝鮮国が同時に天国でもあり、神仙国でもあり、地上国でもあり得ると考えられる。

新羅時代に孤雲崔致遠は、韓国の古代の固有信仰を風流道といい、その風流道は儒仏仙三教を包含しているといっているが、彼が風流道といったのは檀君信仰らしい。檀君信仰には儒仏仙の三教が総合的に包含されている。檀君説話で、檀君が朝鮮国を開国して統治者になったというのは儒教思想である。また桓因を仏教の天神である祭釈天に比喩し、熊と虎に人間になるための試練を与えたのは仏教であって、見性して覚者である仏陀となるためには、祈禱と參禪のような修練をするのと同じである。また檀君が終わりに隠れて山神になったと記されているが、その隱遁的性格は道教と同じである。

古代の風流道である檀君信仰を復活させた大宗教の教理に、儒仏仙三教の思想が総合的に内在しているのは当然のことである。また大宗教の宇宙観において、宇宙を神が創造したというのはキリスト教と同じであり、その神が三神一体だということも、キリスト教の三位一体思想と同じである。

### (3) 大和合思想としての大我思想

大宗教の思想においてわれわれが目すべきことは、その大我思想である。人間を三我と見て、天に根ざした性我と、神に根ざした靈我と、倭に根ざした道我があつて、性我を実現する道は独我観であり、靈我を

実現する道は為我観であり、道我を実現する道は無我観であるが、独我観、為我観、無我観が独り行われると自尊と自愛と自謙に偏しやすいから、この三つが一体となって大我を実現させねばならないといっている。人間はあらゆる人類とともに大我を実現させるのみならず、あらゆる宇宙万物とも大我を実現するべきであるという大和合思想に、大宗教の総合性がよく表れている。またそれは、人間の性と靈と道が人間自体に由来するのでなく、天と神と倭に由来するという自然と人間の一致観、天人合一性、天地は我とともに同根であり万物は我とともに一体であるという東洋的大同思想をよく表している。

### (2) 大宗教から見た宗教統一の可能性

大宗教は、その教理の総合性から、他宗教との摩擦を引きおこすことなく、宗教統一の可能性を示している。大宗教の宇宙観と神観は、唯一神的性格を持ちながら、多神または汎神的性格も持ち合わせており、神が唯一神であるか、多神または汎神であるかという論争を解決することができる。特に大宗教の三神一神思想と神人合一思想は、神中心の思考方式において人間を無観し、人間中心の思考方式において神を無観する両極的思考方式に対し、一つの調整的役割を演ずることができると思う。

また大宗教の天宮思想は、人間の追求する理想郷をよく表しており、その天宮が道徳的理想を表現しているのは感動的である。道徳的理想が実現すれば、われわれの理想社会は必ずしも来世のみに期待する必要はなく、現世においても天宮建設が可能であり、地上天国の実現も期待できると思う。現世か来世か、または地上天国か来世天国かという選択的思考方式よりも、現世と来世を同じく肯定し、来世天国と共に地上天国

を是認する大宗教の思想は、世界観の差異からくる宗教間の紛争を調整して、この点において宗教統一の可能性を提示している。

結論として、大宗教は韓国の民族宗教であるが、その教理の総合性から見て、世界宗教の樹立を目指す宗教統一に寄与することができると考えられる。

セッションⅨ

天理教の経典から見た

アジア共同体構想と宗教統一